

仏教徒が衣を布施する大法要

年に一度、信仰が歓喜に変わる祭典

カティナ衣の謎

簡単に言えば、南方仏教の各寺を支えている仏教徒たちが、僧侶たちに衣を布施する法事のことです。しかしこれは、リオのカーニバルのようなスケールの大きい法要なのです。衣の布施、というのは決して珍しいことではなく、日常茶飯事で行う功德行なのです。先祖供養、誕生祝い、結婚、就職祝い、新築祝い、出産祝い、そういうありふれた記念日にも、お坊様たちに衣をお布施して祝福してもらうことは、当たり前のように行っています。しかし年に一回、衣一着をお布施する特別な法要があるのです。パーリ語で *kaṭhina cīvara pūjā* (カティナ・チーフラ・プージャー) と呼んでいます。カティナ衣 (*cīvara*) のお供え、という意味です。ただの衣ではなく、カティナ衣になるのです。

このカティナとは一体何のことでしょうか？ 何を隠そう、カティナ・チーフラの意味はパーリ語でもないのです。カティナを単独の形容詞として見ると、硬い、粗い、頑丈、決して脆くない、という意味です。また、出家の衣を作るときに昔は木の型枠を使っていたのです。それにもカティナというのです。カティナ・チーフラという場合は、それらの意味で使われているようには見えません。しかし、特別な衣、という意味だけは確かです。ではどのような基準で「特別な衣だ」と決めるのでしょうか？ 日本文化的に考えると、一千万円は軽く超えるような金襴緞子の袈裟のようなものではないかなあとイメージが浮かぶでしょう。でも、それはハズレです。少欲知足を唱える仏教では、金襴緞子の衣は戒律違反です。出家の僧侶たちは触れてもいけないもので、問題外なのです。差し上げる衣は、日常差し上げている衣とまったく同じ質のものです。ですから、値段もぜんぜん変わらない。では、何が特別か、これから考えて見ましょう。

旅にくらしたお釈迦さま

話はお釈迦さまの時代に遡ります。釈迦牟尼仏陀はこころの自由・解放を目指し、王位継承権を捨てて出家した方です。ブッダガヤの菩提樹下で完全たる悟りをひらいてその目的に達したのです。それから何にも捉われることなく、80 歳になるまでインド各地方を歩き、真理と、その真理を体験する悟りへの道を語り続けたのです。お釈迦さまのもとでは次々に人々が出家して、弟子たちの数も増えていったのです。お釈迦さまも、悟りをひらいて修行を完了した弟子たちも、どこにも定住することなく年中旅をしながら伝道に励んでいたのです。身体の贅沢を考えたことはなかったので、春夏秋冬の気候にお構いなく真理を語りながら、旅を続けたのです。

ジャイナ教の非殺生主義

インドではブッダだけが宗教を説く開祖様ではなかったのです。仏典の記録によると、62 種類の宗教があったのです。その他宗教の方々も、自分の修行の一環として遊行（旅すること）を好んで行っていたのです。しかし仏弟子たちの場合は、遊行は自分のための修行ではありません。それは真理を発見できず、生きる苦しみに悩み途方にくれている人々に対して、哀れみを持ち、一人でも多くの人々に、幸福への道案内をする利他行だったのです。他宗教では、遊行は修行でしたので、それなりの決まりしきたりがいろいろとありました。当時のインドで仏教と同じくらい広まっていたジャイナ教という宗教があったのです。ジャイナ教は仏教より古い教えでした。ジャイナ教の開祖様（マハーヴィーラ）もお釈迦さまに比べるとかなり年配の方でした。ということは、仏教より先にジャイナ教は広まっていたということです。この宗教は生け贄を正当化するバラモン教に真っ向から反対して、極端な非暴力主義を語っていたのです。どれほど極端かという、生水にさえ命があるのだと言っていたのです。したがって、出家者は信者さんにお布施されたお湯を飲んでいましたが、決して冷たい水は飲まなかったのです。それでインドに雨が一滴も降らない夏の終わり頃になると、雨季が訪れるのです。夏は熱波で人が死ぬほどの厳しい暑さです。雨季も負けません。絶えず振り続ける雨で、川が溢れてかなり被害を受けるのです。乾いた地面に水がしみ込むと、地中の虫たちは地上に出るのです。ジャイナ教の出家者たちは殺生したくないがために、雨が降ると外へ出られないのです。それでその宗教では、雨季の遊行は禁止です。一箇所に留まって、苦行などの別の修行に励むのです。それと比べると、ブッダの出家弟子たちは雨季なんか全然気にしない。人に真理を語ることをもっと大事にしていたのです。

他宗教との友好を守る工夫

昔のインドでは、宗教や信仰が違ってても互いに交流を保ち、仲良く生活していたのです。複数の宗教者たちは一箇所で夜明かしすることが普通でした。仏教もジャイナ教ほど極端な非暴力主義ではないが、一切の生命に対して慈しみを実践しなさいと説いています。殺生するなかれ、というところで両者は似ているが、ジャイナ教の行者から見ると、比丘たちの雨季の遊行はどうしても気に入らなかったのです。「雨季になると鳥たちも獣たちも一箇所に留まる。人間も家に留まって生活する。それなのに、仏弟子たちは虫を踏み潰して殺しながら遊行する。自分たちの教えぐらい守らないとは何だ。」と非難したのです。互いに非難しながら生活すると、友好関係にもひびが入ります。比丘たちは解決策をお釈迦さまに懇請したのです。それでお釈迦さまは、一つの戒律を定めたのです。「比丘たちに雨季の三ヶ月間、雨安居に入ることを認める。それを守らない人は、軽微な律を違反したことになります。」それから比丘たちは、雨季には遊行を止めて、雨安居に入りました。ジャイナ教との問題も解決しました。

雨安居をカスタマイズしたブッダ

仏教はどちらかというと功利主義か実用主義だと言っても悪くないのです。比丘たちにとっては、雨季の三ヶ月間、一箇所に留まっていることは手持ち無沙汰に感じることでした。それで他宗教と同じ雨安居ではなく、仏教の理に適った雨安居習慣として様々な改良を施したのです。大きな改良としては、在家信者さんの招待を受けることがあります。在家仏教徒は、毎日のように比丘たちに会いたいという気持ちを持っているのです。一箇所に何日も泊まらないお釈迦さまが、自分たちの地方を訪れることは、最高の幸福だと思っていたのです。雨季が近づくと、在家信者は揃って「我々の幸福のために、哀れみをもって、今年の雨季はこちらで安居に入ってください。」と正式的に招聘するのです。もし承諾してもらったならば、宝くじが当たったよりも喜ぶのです。信者さんたちは、比丘たちの住むところ、食事、薬、などの生活必需品をお布施するのです。比丘たちはその三ヶ月間、安居に入った地域のなかで托鉢するのです。また、招待があればその信者さんの家に行って食事の布施を受けるのです。また場合によって、信者さんが食事を用意してお寺まで運んで差し上げたりするのです。その三ヶ月間、地域の人々に説法したり一緒に修行したりするのです。結局、ジャイナ教が始めたような堅苦しい安居の形はなくなってしまったのです。

比丘が雨安居に入る

比丘たちも色々プログラムを組んで活動したのです。修行を完了している阿羅漢の方々は、後輩に瞑想指導をする。自分たちがブッダから直接聞くことが出来なかった法話を、他のお坊さんたちから伝え聞いてお互いに勉強する。出家して間もない方々は、戒律やしきたり習慣を学んだり、仏教を学んだりするのです。他のお坊さんたちは、ひたすら修行一筋に励むのです。それでどなたにでも、雨季安居の三ヶ月間は最大限有効に過ごすことができるのです。仏教の世界では、悟りを開いた人々の数というのは数え切れないほど多いのです。そこで面白い現象があります。ほとんどの人々は、安居の期間に悟りをひらくのです。時期的に考えると、一年のなかで雨季の三ヶ月間はたくさん聖者を作り出す時期なのです。と言っても、修行する皆が悟るということはあり得ません。しかし、出家も在家も、普段よりこころ清らかにするために励む、尊い時期でもあります。ですから、雨季の三ヶ月間は聖なる時期であるという暗黙の了解ができています。

インドの雨季では、雨はだいたい四ヶ月間降りますが、安居は三ヶ月間だけです。夏期の最後の月の満月の翌日（太陰暦の十六日）、安居に入るようにしているのです。それを大安居と言います。その時はまだ雨は降り始めていません。もしその時、安居に入る適切な場所が見つからなかった比丘たちは、次の満月の翌日、安居に入るのです。それは後安居と言うのです。大安居、後安居とも、期間は同じく三ヶ月間です。安居明けになると比丘たちは自由に旅するので、旅に必要なものを揃えることや、健康を回復すること、寺の修理、なども行います。後安居が明ける比丘たちは大丈夫です。もうすでに雨季が終わっているのですから。困るのは、大安居に入る比丘たちです。安居が明けて旅に出ても、実は

梅雨明けではないのですから（どうしてもジャイナ教と同じ習慣にしたくなかったということは見え見えです）。

雨ニモマケズと言っても

昔の比丘たちを困らせた最大の問題は、衣なのです。ジャイナ教の行者は裸形でしたが、比丘たちは首から両手、かかとから 10 センチぐらいまで衣で身体を隠して一般人に会わなくてはならないのです。旅をするときは必ず身体を衣で巻いて旅しなくてはならないのです。衣は三種類あります。1) 下半身をお臍から 15 センチくらい上まで覆う高さ、本人の両手を開いたくらいの横幅がある長方形の腰巻 (antaravāsa)。2) 立って手をまっすぐ伸ばしたぐらいの高さ、両手を広げた長さの 1.5 倍の横幅がある長方形の身体に巻く衣 (uttarāsaṅgha)。3) 2 と同じ長さで、生地が二枚重ねになっている衣 (saṅghāṭi)。3 番目の重衣は重いので、普段は着るよりも肩にかけておくのです。寒いとき身体にかけたり、寝具がない場合に敷いてその上に寝たりするのです。

これは笑い話になりません。ひとりの比丘に、現在売っている生地の単位では 20 メートル以上の生地が必要になるのです。機織するどころか、生地を織る糸さえも手で紡がなければならぬ当時では、たいへんな問題でした。ですから、人々が捨てたボロきれを集めて縫い合わせて、衣を作ったのです。さらに信者さんが新しい衣をお布施しても、一人の比丘は三衣のワンセット以上持つてはならないと戒律まで設定したのです。ですから、着替えなんかはありませんよ。梅雨明け前に安居が終わって、旅に出る比丘たちは、ひどい目に遭います。身体はびしょぬれ、木枯らしが吹きつけて肌寒い。しかしぬれたままで着替えもありません。他人のために頑張っているが、自分の姿は惨めなのです。

お釈迦さまの解決策

その惨めな姿を憐れんだお釈迦さまが、新しい解決策を考案されたのです。「比丘たちよ、カティナ衣を奉納することを認めます。」(受ける、のではなく、奉納する、なのです)。お釈迦さまが前置きも定義もなくカティナ・チーフラと説かれたので、それから皆、カティナの意味は何だ？ と疑問にすることもなく、そのままその単語を使っているのです。比丘たちは新しい衣を受けたことを認め合って、それを適切な比丘に渡す儀式を行わなくてはならないのです。「これは誰にあげようかなあ」と決めるようなものです。この儀式があるため、お釈迦さまの命令文では、受ける、ではなく、奉納する、という言葉を使っているのです。普通の衣なら貰った人のものですが、この場合は戒律儀式を行う場所で 4 人以上の比丘たちを集めて、衣を使用することが相応しい人を正式的に決めるのです。これはややこしい手続きですが、そのややこしさが、カティナ衣、特別な衣、の意味なのです。

大安居に入ってその決まりを正しく守って、サンガの前で正式的に安居明け儀式を行う比丘でないと、この衣の布施を受けることは出来ません。後安居の比丘たちには出来ません。カティナ衣をいただいた比丘には、着替えの衣を持つことが出来るのです。これは当

時としてはたいへん有難い特権なのです。また、カティナ衣を受けている比丘には、他の四つの特権もありますが、ここでは省略します。カティナ衣は本来、その場所で大安居を終了した比丘たちのうちひとりしか受けられないのです。しかし、同じ場所で大安居に入った比丘たちがその日のうちに皆を集めて、カティナ衣を受けた比丘が、「サンガ（五人以上の比丘たち）により法に従ってカティナ衣を奉納されました。あなた方も賛成し喜んでください」と報告します。他の比丘たちも「サンガにより法に従ってカティナ衣を奉納されました。私も賛成し喜びます」と言います。すると、その儀式によって、カティナ衣を受けた比丘の特権は他の比丘たちにも及ぶのです。

在家信者の出番

カティナ衣を奉納することを認めたことは、比丘たちには自分たちの日常生活において、この上のない有難い便利なことになりましたが、肝心な衣はどこですか？ そこで在家信者さんたちの出番なのです。在家信者たちは衣か衣に適量の生地を用意して、雨安居が明けた次の日から翌月の満月までの間で比丘たちが住んでいるところに持って行って「この衣（または生地）をサンガにカティナ衣としてお布施いたします」という文句を唱えて、差し上げるのです。お布施を受けたサンガが戒律儀式を行う場所（戒壇）で集まって、以上説明した儀式を行うのです。在家信者と比丘サンガの協力があるのみ成り立つという仏教の戒律儀式は、これしかないのです。在家信者さんたちにとって、カティナ衣を差し上げるチャンスはたいへん大切な意味を持つことなのです。

招待と送別の儀式

まず、自分たちはお坊さんたちを招待したのです。お坊さんたちも招待を受けて、雨季その地域の用意されたところに住んで、信者さんたちに仏教の真理を論ずこと、自分たちの修行を進めることなどを行ったのです。信者さんは毎日、仏教に触れることもお布施をすることも出来たのです。三ヶ月間以上、まじめに五戒を守って、法を聞いて、善い行いをして生きることは、とても平和的で楽しいものです。日常的なケンカや諍いなどはこの間はないのです。お供え物を用意することなどを考えると、三ヶ月以上、お祭りのような生き方なのです。安居が明けたところで、いままでお世話になったお坊様方を見送らなくてはならないのです。お坊様方を見送る祭りのハイライトはカティナ衣なのです。信者さんは衣一着をあげて安上がりで良かったと思うことは決してないのです。他のお坊さん達にも必要なものや必要な衣、その他の必需品などもお布施するのです。カティナ衣になるのは、三衣の一つなのです。そうすると、その地域のひとりだけしか行えない善行為になるのです。これは不公平です。カティナ衣をお布施することで、最大級の徳を積むことができるのです。それはたった一人にしか行えないというと、全然仏教的ではありません。言い忘れましたが、仏教は厳密に民主主義なのです。

皆で平等にワクワクしながら功德を積む

この問題も、ちゃんと解決してあります。個人個人が持っているどんなものでも、お布施したいと思うならば、このカティナ衣と一緒に持っていけば善いのです。カティナ衣をお布施する儀式と同時に、すべての品物は比丘サンガにお布施したことになるのです。皆平等にカティナ衣の布施の功德を得るのです。自分が布施した品物の徳は、プラスアルファで追加するのです。昔なら衣のための生地を織ることは村のみんなで共同作業したのですが、いまの機械文明の時代では無理です。しかし時代が変わっても、皆に平等に功德を積むことが出来るようになってきているのです。タイでのカティナ法要では皆ベッド、冷蔵庫、タンスなども手当たり次第、自分がお布施したいものは持っていくのです。むかしNHKテレビで観たことがあるのですが、ある水商売をしているタイの女性が、一年間働いて貯めたお金を、ぜんぶこのカティナ法要でお布施してしまったのです。彼女が取材陣にインタビューされたのです。「あなたはそれで困らないのでしょうか？」と。「いや、これこそが私にとって何よりの喜びです。一年の苦労はこれで報われるのです」と女性は答えたのです。その地域の貴賤高下を問わず、皆参加するのですが、衣のお布施儀式を行うときは、皆一緒に集まった方がよいと思っているのです。それでどうなったかというと、自然に大パレードになってしまったのです。どうせパレードになるのならば、それも本格的にやろうと、踊りや音楽、太鼓、山車、花火など何でもあるのです。年寄りから子供まで、誰でも最大の祭りとして楽しむのです。派手な踊りを踊りながら、戒律の厳しいといわれているお寺に行くのは矛盾でおかしいではないかと考えられるでしょう。仏教徒はそう思っていないのです。カティナ法要では音楽を奏することも踊ることも同じ布施行為だと信じているのです。単なる信仰ではなく、論理的に考えるとそうなるものなのです。踊りなんかは出家者には何の関係もないが、それによって村人は皆参加するのです。時々、仏教徒でない人さえも、喜んで参加するのです。たとえ滅多に善い事をしようとしなない人であっても、お布施に参加する気持ちになるのです。

出家者がまとめて誕生日を祝う？

比丘サンガの立場から考えても、大事なポイントはいくつかあります。比丘たちの間では、出家した日から年齢を数えるのです。「あなたは何歳？」と比丘が比丘に聞かれたら、それは誕生日から何年経っているのか、という意味ではありません。出家してから、何年ですか、という意味です。比丘になった年は一歳で、雨安居の回数により歳が上がるのです。誤解するから、「あなたは何歳？」とは聞かないで、「あなたは雨安居 (vassā) は何回ですか？」と訊くのです。それによって先輩・後輩を区別するのです。ということは、比丘たちにとっては、雨安居明けは比丘としての誕生日でもあり、お正月でもあるのです。

テーラワーダ仏教の国々では、どこでも町や村に寺が出来て、人里を離れたところに修行道場などが出来ているのです。仏教ははじめから管理制度がしっかりしてあったのです。いまの大寺院などは、現代の比丘たちが元の教えから墮落して脱線した結果ではないので

す。ちゃんとした規則・決まりにのっとって、個人の生き方、集団としての生き方、建物などの維持管理などが出来ているのです。体罰や刑務所などはないが、独自の裁判制度まであります。それは俗世間の法律よりも遥かに厳密に公平に審理が行われるのです。仏教は信者さんのお布施によってのみ成り立っているものです。しかし、これが必要、と信者さんに要求してはいけません。食事を貰っただけでは、比丘たちの生活が完全に成り立つわけではありません。必要なものは家族・親戚以外の人に要求してはならないのです。不足しているものもいくらでもあります。カティナ法要では、その寺に関係ある信者さんたちが寺の内情をよく調べて用意してお布施するので、お寺は助かるのです。

カティナ衣の特別なしきたり

カティナ衣に関するすべての作業は一日で終わらなければならないのです。これはお釈迦さまに定められた決まりとは思えませんが、カティナ衣の布施行をとっても大事なものとして認識させるために、徐々に確定された習慣だと思います。信者さんたちが朝早く、白い生地を行列を組んでお寺に持って来ます。そのままサンガに布施するならば、「サンガにカティナ衣の生地を布施します」という文句で布施するのです。そのままお布施しないならば、寺のお坊さんたちと信者さんたちが揃って、その生地で作るのです。それから、染めるのです。衣が乾いたところで、「サンガにカティナ衣を布施します」という文句でお布施するのです。比丘たちは、その衣を持って戒壇で集まって、法の儀式を行うのです。その日のうちに、衣をいただいた比丘は一緒に安居に入られた比丘たちと一っしょになって、カティナ衣の奉納への賛成儀式を行わなければならないのです。その儀式を行う前に、衣を貰ったお坊さんは、自分がいま使用している三衣の一着の私有権を放棄して、代わりにカティナ衣を個人使用にするのです。昔は衣づくりはすべて手作業でしたので、たいへんな行事になったでしょう。いまは工場で品質よく染め上げられた生地は安く手に入るし、ミシンもあるから、一時間以内で衣を縫うこともできるのです。だから、当時の人々がいかんたいへんな思いをして衣のお布施をしたかということは、現代人にはなかなか実感が湧かないだろうと思います。

現代でも、何着でも衣が安く手に入るからと言って、複数の衣をカティナにすることはできないのです。カティナとしてお布施することも認定することも出来るのは、三衣の一着だけです。これも昔の人々に負担がかからないようにと考えたことでしょう。

カティナ法要の功德

これほど大事なカティナ法要に、どんな徳があるのかと興味が湧くだろうと思います。カティナ衣布施の功德として特別に語られた箇所は残念なことにありません。しかし、アパダーナ・パーリという小部經典に入っているテキストの中に、過去仏たちにわずかなもの（花一本、果物一個、坐る場所を用意したこと、など）をお布施しただけでも、何劫にもわたり、地獄に墮ちることなく天界・人間界に幸福に満たされて生きてきたことと最終

的にお釈迦さまに出会い、修行して完全に悟りをひらいたことを記録したエピソードがたくさんあります。衣などの着るものをお布施すると、何処に生まれてもとても美しい魅力的な身体を持って生まれるのです。つねに最高級の服を着て生活することもできるのです。また、アトピーなどの苦しい皮膚病などには罹りません。手が火傷したりしても、完治して傷跡は残りません。激しい気候変動にも耐えられる体質になるのです。幸福に溢れて輪廻転生すると、ものに執着する気持ちもどんどん減っていくのです（私たちの場合は、ちょっとしたブランド品を買っても財布に響くのです。ですから買い求めたものには自然に執着する羽目になるのです。生まれてから一生、高級品だけに囲まれて生活する人にとっては、執着する気持ちは生まれてこないのです）。執着しない性格は、智慧の完成と解脱を促すのです。

衣一着でもお布施したら、得られる功德はこのようなものですが、この衣一着をサンガに布施すると、功德の量は「無量・無制限」だと言うのです。なぜならば、布施を受ける側の数が、無量です。無数の聖者たちにお布施をしたことになるのです。気持ちの問題だと軽く見えてはいけません。功德とはすべて、気持ち次第です。功德とはここに現れる清らかな印象のことです。無量・無制限に功德があるということ、仏教の論理的思考にあわなくなるのです。功德を積んだ個人が、解脱を体験して輪廻を脱出するまで、という意味なのです。いまは俗世間の快樂に浸ってしまっただけで解脱の概念なんかは論外だと思っている方であっても、功德を積んでおけば輪廻転生すると飽きるほど幸福になるので、気持ちは自然に解脱の方向へ傾くのです。ですから、仏教徒は功德を積むと解脱することがたやすいことになるのだと理解しているのです。仏教国の人々が何かにつけて功德を積もうと励むのは、そういうわけがあるからです。

カティナ衣の場合は、年に一回しか出来ない。それまた大安居に入ってその決まりを守って安居を正しく完了した比丘たちがいなければ行えません。そのような比丘がひとりいても、その比丘にサンガを召集したり、その一日のサンガの面倒を見てあげたりする能力がないとカティナ法要は出来ません。そのような貴重な機会になるので、功德の量は想像もつかないレベルまで高まるのです。カティナ衣はサンガに布施するものなので、はじめから無量の功德を得ることは決まっています。また、カティナ衣を受けた比丘たちも、五つの特権を得る。それは信者さんたちのお陰なので、さらに功德が高まるのです。安居の三ヶ月間、在家出家を問わず、まじめに修行し、ここは清らかな状態で保たれている状態で行われる布施行為なので、功德はさらにさらに高まるのです。

カティナ衣法要は決して単独で行わないのです。集まるお坊さん達へのお布施や、その寺と安居に入られたお坊さん達の必需品やらあらゆるものを一緒にお布施する大法要なので、その分も、功德が増えてしまうのです。お釈迦さまさえも、「サンガへの布施の功德は言い尽くせないのだ。無量なのだ。」と説かれているので、カティナ衣の功德について語ることは、もうこの辺で終わりにさせていただきます。

揺るがず受け継がれるカティナ法要の精神

仏教徒はさまざまな創意工夫を凝らして、このカティナ法要を盛大にお祝いしています。部外者から見れば、カーニバルっぽいという印象を持たれても仕方ない面もないわけではないのです。しかし、カティナ法要は決して墮落していません。参加する仏教徒たちは、仏教の歴史的に見てもこの法要にどれだけ重要な意義があるのかということをよく理解しているのです。それは仏道の修行に励み、大いなる悟りをひらいた聖者たちを称賛する祝祭であり、出家者にとっての新年行事でもあり、律蔵に定められた戒律行事でもあるのです。どんな習慣も崩れるのは普通ですが、時代によって様々な要素が付け加えられていったとしても、カティナ法要の尊さはいまだに崩れていないのです。(了)

ご注意：本稿の著作権は日本テーラワーダ仏教協会に帰属します。
無断転載・転用はご遠慮下さい。(宗) 日本テーラワーダ仏教協会
<http://www.j-theravada.net/>